

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

—私立学校に対する意識に着目して

高 曉楠

A study on the occupation view of teacher of China's normal university student—focus on the employment consciousness on nongovernmental school

Xiaonan GAO

As the main purpose of this paper, is to make a comprehensive analysis on the occupation view of teacher of the normal university students in China, especially focuses on the occupation view of teacher and the employment consciousness on nongovernmental school through interview survey. The normal university should intensify the curriculum of private education and develop a career counseling for promoting the employment of nongovernmental school.

目次

I はじめに

1. 研究目的
2. 先行研究のレビュー・検討
3. 先行研究の不足点

II インタビュー分析

1. インタビューの概要と関心
2. 師範系大学生の教職観
 - (1) 教職志望の形成
 - (2) 私立学校及び私立学校における教職に対する意識・理解

III 結論

I はじめに

1. 研究目的

中国の高等教育の急速な拡大により、大卒者数は年々増加する一方である。しかし、中国の大学生が自由に就職できるようになったにもかかわらず、無

業状態に置かれている大卒者が少なくない。近年、中国では大卒者就職難を改善するための諸々の政策が実施されてきた。また、大学生を対象とする職業観についての研究も行われている。

現状では、中国の一般大学生の職業観を論じる研究は多数あるが、師範系大学生を対象にした研究はそれほど蓄積されていない。教師の予備軍と言われる中国の師範系大学生は、実際には教職を希望することが多くないことが知られている。学校セクター別にみれば、公立学校と比べて私立学校への就職を希望する者はさらに少ない。なぜ師範系大学生は教職を選択することを希望しないのか、特に私立学校への就職を避けようとするのかを明らかにすることは中国の教育の発展にとって解決が求められる課題である。

本文は、まず、中国の師範系大学大学生の教職観に関する先行研究を整理することを通して、職業観の全体像を把握する。次に、河北師範大学師範系学生に対するインタビュー調査の結果を以て、私立学校の教職に就くことに対する意識を明らかにし、分析する。

2. 先行研究のレビュー・検討

中国における大学生の教職観に関する研究は、小中学校教員の養成を担う師範大学の大学生を対象にしたものが一般的である。中国における師範系大学生の教職観に関する研究は教員養成の開放化とともに、2000年から蓄積されていると見られる。これらの研究では、中国の師範大学師範系学生の教職志望が低下する問題が共通して言及されている。楊(2006)では、広西師範大学の2002年度の大学生の30%は教育部門での就職を回避する意向であると述べられている。曹・李・劉(2005)では、小中学校の教職志望を持つ師範大学学生の割合は非発展地域出身者の8.5%、発展地域出身者の2.9%であるという結果が得られた。葉(2000)は、安徽師範大学の1999年度の師範系大学生480名を対象に職業観に関する調査を行った結果、教職に関連する職業の選択率の合計がわずか23.2%であることが分かった。

教職の仕事に中国の師範大学師範系学生の支持が集まらない理由について、葉(2000)は、教師の社会的地位が低いことが主要な理由であると述べ、「教職」を師範系大学生が低く評価することと社会的には高く評価されることとが矛盾していると指摘した。しかし、大学生がなぜ教師の社会的地位を低く評価するのかには言及されていない。他方、楊(2006)では、教職が師範大学学生から支持が集まらない理由が、「待遇が悪い」(25%)、「権力がない」(20.8%)、「大きな社会貢献ができない」(12.2%)、「軽視されている」(8.2%)のように示された。しかし、「待遇」は給料と福利厚生など色々な細部を包含する概念であるため、師範大学学生の意識を明白に把握したとは言いがたい。

中国全国規模での調査がまだ行われていないため、中国の師範大学大学生の教職観を見るためには、今までの先行研究の結果に共通する部分はもちろん、個別のものにも留意することが必要である。そこで、以下で筆者は中国の師範大学学生の職業観または教職観に関する先行研究に使用されてきた項目－「職業観の構成」、「職業選択に際して重視する要素」、「理想の勤務地」、「理想の就職先」、「就職情報の収集ルート」、「就職後の転職志向」、「期待初任給」、「その他」に分けて、項目ごとに整理・検討する。

師範系大学生の「職業観の構成」について、趙・張(2005)による遼寧師範大学大学生の職業観に関する調査では、師範大学大学生の職業観は「安全感と貢献」「地位と声望」「自主と発展」「経済的報酬」「達成感」という5つの要素から構成されている。張(2005)は、内モンゴル師範大学を対象とした調査で、師範大学大学生の職業価値観が「発展」「地位」「声望」「福利・待遇」「勤務環境」「安定性」「家庭的要因」という七つの尺度で構成されると述べた。また、「地位」「福利・待遇」「勤務環境」の三つの尺度における重視度では、女性より男性のほうが強く、両者間に顕著な差異が見られた。一方、女性のほうは仕事の「安定性」と「声望」を重視し、男性は収入を重視することが分かった。また、モンゴル族出身者が「発展」「地位」「福利・待遇」「勤務環境」「安定性」を漢族より重視しているという職業観の民族的差異が見られる。農村出身者は都市出身者より「福利・待遇」を重視している。また、親の職業が師範大学大学生の職業価値観に影響を与えることが指摘されている。農牧業に従事する家庭の出身者はその他の家庭環境の出身者より、「福利・待遇」を重視することが指摘された。

師範大学大学生が就職する際にもっとも重視する要素について、葉(2000)では、「学業と仕事との適性、個人能力の発揮」(62.2%)、「仕事の安定性」(58.6%)、「収入」(48.8%)という順位である。姚・束・王(2001)では、「個人能力の発揮」「給与水準」「社会的地位」という順位が示されている。また、「総合的能力」「社交能力」「家庭背景」などが就職を円滑に実現する上で重視されている要素であると指摘した。高・崔(2002)では、師範大学学生は「職種の将来性」「個人能力が発揮できること」「研修」をもっとも重視し、「福利・待遇」「給与」などが次に重視されることが分かった。李・王(2004)では、「経済的待遇」(87%)、「職種の将来性」(75.9%)、「仕事から得た達成感」(71.6%)という順位である。張(2004)では、「収入」(49.2%)、「就職先の経済的将来性」(46.7%)、「自分の趣味と一致すること」(46.7%)という結果である。趙・張(2005)では、「安全感と貢献」「地位と声望」「自主と発展」という順位である。また、師範大学大学生の職業観において性別による差異は

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

存在しないと指摘した。曹・李・劉（2005）は、学生の出身地域の経済的発展度の違いによる職業観の差異という視点から、山東省の師範大学在校生を対象に調査した結果、発展地域出身の大学生は「趣味」と「学んだ知識が実際に役に立つこと」を重視する反面、非発展地域出身の大学生が「福利」と「収入」を重視することが分かった。張（2005）の内モンゴル師範大学の大学生を対象にした調査結果では、もっとも重視する項目が「収入」「就職先の経済効益」「職種の将来性」「自分の性格と能力との対応性」であり、比較的重視していない項目が「遠隔地での就職」「職場と家の距離」「転職」「権限」「海外に行く機会」という結果が示された。陳・杜（2007）は師範系大学生の職業観に対して定量分析を行った。その結果、「経済的報酬」が教職に就く意向がない師範系大学生が教職を敬遠する規定要因であった。王・呂（2007）は、中国山西省のある師範学院の師範系学生の職業観に関する調査を行った。師範系大学生は「人間関係」「精神的追求」「社会的貢献」及び「自己成長」

を重視する一方、「物質生活」と「声望」を比較的重視していないとした。

以上、2000年代における中国の師範大学大学生が就職するに際して重視する要素を先行研究から抽出した。これらの先行研究では、研究方法・視点および調査対象・時期が異なるため、研究結果には一致しない部分が見られる。そこで、筆者は先行研究における師範大学大学生が重視する項目の順位を表1に整理した。ここからは、2000年代に中国の師範大学大学生が重視する要素に変化が生じていることが読み取れる。すなわち、2000年から2002年までの研究では、「経済的報酬」が次位のものにあるが、2002年から2005年までの研究結果では、「経済的報酬」が首位に移行するとともに、その他の項目が次第に次位に移行するようになることである。2005年からの研究では、「経済的報酬」が重視される結果が見られるが（陳・杜 2007）、「安全感と貢献」や「人間関係」など内面的な欲求を充実させようとする意識が強まる動きが見出される。

表1 師範大学大学生が重視する項目の順位

研究	師範大学大学生が重視する項目の順位（重視度は左から右へと漸減する）
葉(2000)	「仕事との適性、能力の発揮」「安定性」「経済的報酬」
姚・束・王 (2001)	「能力の発揮」「経済的報酬」「社会地位」
高・崔 (2002)	「職種の将来性」「能力の発揮」「研修」「福利」「経済的報酬」
李・王 (2004)	「経済的報酬」「就職先・職種の将来性」「仕事への達成感」
張 (2004)	「経済的報酬」「就職先・職種の将来性」「趣味との適性」
張(2005)	「経済的報酬」「就職先の経済的未来」「職種の将来性」「性格と能力との適性」「遠隔地での就職」「職場と家の距離」「転職」「権限」「海外に行く機会」
曹・李・劉 (2005)	「経済的報酬」「福利」(非発展地域出身の大学生の場合)
趙・張 (2005)	「安全感と貢献」「地位と声望」「自主と発展」
陳・杜 (2007)	「経済的報酬」
王・呂 (2007)	「人間関係」「精神的追求」「社会的貢献」「自己成長」「物質生活」「声望」

注：項目名称の使用が研究者によりばらつきがあるため、「給料」や「収入」を「経済的報酬」に置き換え、同じ意味を持つものを同一にした。

師範大学学生がもっとも理想とする勤務地について、曹・李・劉（2005）では、発展地域出身者が「沿海部」（48.2%）、「省都都市」（21.4%）、「首都、直轄市」（18.5）、非発展地域出身者が「沿海部」（49.7%）、

「県レベル都市」（18.2%）、「首都、直轄市」（11.8%）という順位になっている。また、高・崔（2002）の華東師範大学の2001年度卒業生を対象にした研究では、卒業生のほとんどは上海など中国沿海部の発

展地域に就職したという結果が示された。張(2004)では、「遠隔地や農村地域に就職する」という意向を持つ師範系大学生はわずか1.4%であったが、韓・安(2007)の研究では、その比率が4.9%に上昇した。それは、2003年から実施されてきた、大学生の中国西部の貧困地域の教育、医療、農業などへの就職によって中国西部を支援し、大卒者の就職を促進する「大学生志願服務西部計画」と、2006年からの師範大学卒者または教員免許を有する非師範系大卒者を対象とする、中国の農村部で教職に就かせる「農村義務教育段階学校教師特設ポストプロジェクト」など大学生の貧困地域での就職を促す国家プロジェクトが、大学生の農村地域への就職意向をある程度引き出したことが考えられる。涂・李(2005)では、師範大学学生の71.7%が以上のような政策の影響で中国中西部の農村小中学校に就職する意識を持つようになったことが示された。しかし、農村地域への就職志望率はわずか1割未満であるため、師範系大学生は、「都市部」あるいは「沿海部」といった発展地域を希望する一方、農村部及び内陸部を避ける意識があるといえる。

中国の師範大学大学生にとって、もっとも理想とする就職先は「政府機関」あるいは「公務員」という回答が先行研究の中には多く見られる⁽¹⁾。これは、先述した中国の一般大学生とほぼ同様である。また、葉(2000)と曹・李・劉(2005)の研究では、非発展地域出身の師範大学大学生の「政府機関」への就職志向がより強いという傾向が見られた。これも、朱・周(2010)による一般大学生を対象とした研究の結果と一致している。また、葉(2000)では、師範大学大学生にとって、もっとも理想的な仕事は、「公務員」(31.8%)、「科学技術職」(16%)、「大学教師」(12%)、「金融業の管理職」(6%)、「一般管理職」(5.6%)、「軍事学校教師」(5%)、「大都会の教師」(4.4%)、「国有企業の管理職」(4%)、「マスメディアに関連する職」(3.8%)、「作家」(3.2%)、「記者」(2.8%)、「弁護士」(2.2%)、「ビジネスマン」(2%)、「県レベルの中学校教師」(1.8%)となっている。つまり、教職の仕事の中では、大学教師は師範大学大学生にとって魅力を感じられるものであるといえる。

就職情報の収集ルートについて、姚・東・王(2001)

による安徽師範大学在校生1000名を対象にした調査の結果、師範系大学生の主要な就職情報の収集ルートは招聘会(人材交流会)であった。また、大学生が大学の就職指導に低い満足度を持つことが明らかにされた。一方、葉(2000)によれば、師範系大学生の8割以上は「相互的選択、自由就職」という就職政策に賛成することが分かった。高・崔(2002)による華東師範大学の2001年度卒業生を対象とする就職状況に関する調査結果では、「学校の就職指導センター」(61.9%)、「招聘会」(61.3%)、「学校内部の招聘会」(50.6%)、「大学教師による推薦」(38.1%)という順位である。華東師範大学は中国の大学ランクの上位に位置する、中央政府に所属する重点大学である。他方、姚・東・王(2001)の研究対象である安徽師範大学は省政府に所属する地方レベルの大学である。この両大学において、大学生の就職情報の収集ルートおよび大学による就職指導への満足度に大きな差異が見られる。つまり、大学がランク上位にあるほど、大学生による就職指導に対する満足度は上昇する傾向がある(孟2007)。一般の大学生と同じく、師範系大学生も自主的な就職意識があるにも関わらず、大学による就職支援に対する満足度は低い。また、一般大学だけではなく、師範大学でも就職支援が不足しているという問題がある。しかし、中国の師範大学では、教職、特に私立学校で教職に就くための就職指導の現状およびそれに対する大学生の期待などに関して、これまでの研究では全く触れていない。

冯(2005)では、被調査者の25.1%が「就職の情報不足している」と感じ、28.9%が「社会関係資本の欠如」による就職の困難さを感じていることが分かった。また、北京師範大学の調査によれば、被調査者の26.4%が「社会関係資本が就職の情報を獲得するための重要な手段」と考えている。仇・林(2007)では、大学生の4割は親族のコネが就職を達成する上でのもっとも有効な手段と考えている。先述した中国の一般大学生と同じく、師範大学学生も就職に際しての社会関係資本の重要性を意識している。社会関係資本は就職の達成に有用性がある一方、就職をめぐる競争の公平にマイナスの影響を与えており、大学生の職業観に反映されている。特に、

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

中国の師範大学大学生は、農村部出身者が多く、都市部出身者と比べて、社会関係資本の保有量が比較的少ない。また、大卒者の就職が主に中国の都市部に集中するため、都市部での社会関係資本による就職達成において、農村部出身者は弱者層であると言わざるを得ない。本研究では、就職の公平性を視野に入れ、インタビュー調査の結果をもって検討する。

師範大学学生の転職志向について、楊（2006）では、教育部門に就職する意向がある大学生の25%で、教職キャリアの途中で他の職業に転職する意識があることが示された。

師範大学学生の期待初任給について、張（2004）では、期待初任給が「1000元以下」（1%）、「1000元～2000元」（33.5%）、「2000元～3000元」（34.2%）、「3000元～4000元」（9.2%）、「4000元以上」（21.2%）という結果がある。また、高・崔（2002）によれば、師範大学学生の43.8%の期待初任月給は2001元～3000元である。他方、就職した後の実質初任給の期待初任月給に対する割合はわずか21.9%であり、大卒者の6割以上の実質初任給が1001元～2000元に留まっていることが明らかになった。つまり、師範大学学生の期待給与と実質給与にはギャップが存在する。期待初任給において、師範大学学生と一般大学学生との間でそれほどの違いは見られない。

3. 先行研究の不足点

一般大学だけではなく、師範大学でも就職支援が不足しているという問題がある。しかし、中国の師範大学では、教職、特に私立学校で教職に就くための就職指導の現状およびそれに対する大学生の期待などに関して、これまでの研究では全く触れていない。教職の仕事に中国の師範大学師範系学生の支持が集まらない理由について、葉（2000）は、教師の社会的地位が低いことが主要な理由であると述べた。しかし、大学生がなぜ教師の社会的地位を低く評価するのかには言及されていない。他方、楊（2006）では、教職に師範大学学生からの支持が集まらない理由の選択率が、「待遇が悪い」（25%）、「権力がない」（20.8%）、「大きな社会貢献ができない」（12.2%）、「軽視されている」（8.2%）のように示された。しかし、「待遇」は給料と福利厚生など色々な細部を包

含する概念であるため、師範大学学生の意識を明白に把握したとは言いがたい。今までの研究はアンケート調査を主な研究方法として利用してきた。しかし、アンケート調査は質問項目の使用によって職業観の新たな様態を見逃すことが避けられない。また、特に師範大学大学生が私立学校の就職を避ける理由を究明するには限界があるため、インタビュー調査が必要と考えられる。

II. インタビュー分析

1. インタビューの概要と関心

筆者は2011年12月2日から2011年12月7日まで、中国河北省石家荘市にある河北師範大学師範系4年生3名を対象に、個別聴き取り調査を行った。インタビューは静かな個室で行われ、その内容はICレコーダで録音した。データの使用目的及びICレコーダで録音することについては全員から事前承認を得た。使用言語は中国語である。

地方都市の石家荘市は、中国の25の省都の一つである。現在、経済体制転換期にある中国と近い産業構造を有している。河北師範大学は省都政府（地方政府）に所属する師範大学である。このような師範大学（師範学院）は全国で91あり、中国の高等師範教育機関（本科）の9割を占めている。河北師範大学の師範系大学生を対象にすることで、大都市にある教育部所属師範大学のエリート意識を持った大学生を避けることができる。

表2 インタビュー対象の概要

対象	性別	所属	進路先決定状況	出身地と戸籍	訪問時期 録音時間
Tさん	女性	河北師範大学文学部 漢言語文学専攻	決定 河北省内の県の公立中学校 で代用教師に就く	河北省にある県 農業戸籍	2011/12/2 36m15s
Gさん	男性	河北師範大学文学部 漢言語文学専攻	未定	山東省濰坊市に所属す るある県 農業戸籍	2011/12/3 35m22s
Lさん	女性	河北師範大学物理科学 及び情報工程学院 物理学専攻	決定 河北省内の県の公立高校で 代用教師に就く	河北省石家庄市に所属 する藁城県 農業戸籍	2011/12/5 55m54s

インタビュー録音を逐語記録した上、重要なカテゴリーを抽出し、以下のような事項を中心にインタビュー調査を行った。

1. 教職志望の形成
2. 師範大学における就職指導、特に私立学校への就職を念頭に置いた教員養成及び就職支援の実態
3. 公立学校に就職することを通して、農業戸籍を非農業戸籍に転換しようとする意識の実態

調査対象者の大学生3名は私立学校の就学経験や見学した経験が全くないことをあらかじめ述べておく。この特徴は今回の質的調査の大きな背景となり、師範系大学生の教職観に影響を与えるものである。

2. 師範系大学生の教職観

(1) 教職志望の形成

師範大学師範系四年生のTさんとLさんは、大卒後に公立学校で教職に就くことの内定を得ている。教職志望について、二人とも幼い頃から教師になる夢を持っていた。

「私は小学生の頃から教師になりたかったです。それは中国の教育の弊害や指導してくれた先生たちによる影響が少なくありません。いい先生とそうでない先生の両方から影響を受けています。私は教師になって、自分の学生たちに正しい価値観と人生観を教えたいです。」

(Lさん)

「小学生の頃から教師になりたかったので、そのまま師範大学に入学したのです。小学生の頃、隣のクラスのクラス主任はそのクラス全員の記念写真を撮ったことがあって、羨ましかったです。も

しこれから自分が教師になれば、学生と写真を撮りたいです。中学生の頃、語文(中国語)を担当するクラス主任になりたかったです。自分の力で素晴らしいクラスをリードしたかったです。また、語文(中国語)という科目は学生の人間性の向上に役立つと思います。もちろん、教職を選んだのは家庭からの影響もあります。親たちは私が安定的な仕事に就くことを望んでいます。」(Tさん)

つまり、TさんとLさんの場合、教師との接触といった過去の学校生活の経験から教職志望が次第に形成されてきたと言える。また、このような大学進学前に形成された教職志望は師範大学への進学、さらには卒業時における教職への就職にプラスの影響を与えていると考えられる。Lさんは「ほかの仕事は一切考えたことが無く、教師しか就きたくないです。」と強い教職志望を示した。しかし、TさんとLさんは事実上公立学校に就職することになるため、筆者は二人に私立学校の教職に就く志望があったかどうかを尋ねた。

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

Tさんは「公立学校を優先的に考えていたのです。もし公立学校に就職できなければ優秀な私立学校を考えていくかもしれません。」と答えた。一方、Lさんは「私立学校で教職を就くことを考えただけではなく、私立学校に実際に行き、教師を募集しているかどうかを尋ねてみたこともあります。そのときは教師を募集していないと断られました。しかし、この間、大学で開催された人材招聘会でその私立学校の姿を見て、騙されたような感じです。」と自分の就職経験を述べた。つまり、公立学校を就職先として優先的に考える教職志望者が多数を占めるが、私立学校を第一に考える教職志望者も実際にはいる。一方、中国の私立学校は、偽りの学校宣伝や一方的な利益を追求するために高額な授業料に見合わない質の低い教育を提供しているなど、信用を低下させているという問題がすでに多くの研究によって指摘されている(陶・王 2010)。Lさんの経験からも、私立学校は人材採用に当たって信用性を高めるべきであるということが示唆される。人材採用の面の不信は、私立学校への教職志望者の就職熱意にダメージを与えるだけでなく、私立学校にとって人材の浪費になりかねない。さらに、私立学校は人材招聘会など公式の人材採用ルートだけに拘るのではなく、私立学校への教職志望者を積極的に歓迎する姿勢を取り、個別採用など柔軟な人材採用の仕組みを構築することが必要である。

Gさんは現時点ではまだ就職先を決めずに、「来年実家に帰ってから、本格的に就職活動を始めたいと思います。」と、来年6月に大学卒業後、実家(山東省)の方で就職する考えであるため、大学所在地(河北省)における就職活動を積極的に行っていない。つまり、勤務地と実家との距離は大学生の就職地域の選択に影響を与えている。また、Gさんの理想の仕事は、「教師」ではなく、「公務員」や「事業単位」といった「国有機関」である。これは、現在の大学生一般の望ましい就職先と一致している。

「私は特に教師になりたいという気持ちはありませんが、一応一つの選択肢として考えています。しかし、教師の給料は実家のほうがより高いですから、例えば教師に就いても、実家のほうで就職し

たいです。……この教師が公立学校の教師です。私立学校に就職することを考えたことはありません。」(Gさん)

中国では、公立学校の教員給与は地域間でばらつきが存在している(欒 2009)。このような現状はすでに師範系大学生の就職意識に反映されているといえる。さらに、筆者の「もしあなたが公立学校に就職するとすれば、どの公立学校を選択するかは何によって決めますか。」という質問に対して、「給料だけです。」と返答した。師範系大学生が公立学校の範囲内で就職先(学校)を選択するに際して、主に「給料」という要因が作用しているものと考えられる。

(2) 私立学校及び私立学校における教職に対する意識・理解

以上、調査対象者の進路先決定状況、教職志望の有無及び教職を希望する理由を把握した。

本節では、私立学校及び私立学校における教職に対する大学生3名の意識・理解を検討する。この部分については、大学生の私立学校に対する素朴な意識を捉えるために、筆者から特に具体的な質問を出さず、大学生になるべく自由に発言してもらえようにした。

①教員給与

中国の公立学校と私立学校の教員給与水準について、Lさんは「公立学校と私立学校の間の教員給与の差は大きくない」と考えていたが、TさんとGさんは「私立学校の給料はより高い」と述べ、異なる認識が見られた。しかし、近年、中国の公立学校における教員給与の増加に伴って、私立学校に従来はあった給与面の優勢が次第に縮小している(宋 2010、孫 2003)。師範大学師範系大学生のなかで私立学校の給与水準に対して異なる認識がある理由としては、中国都市部にある一部の有力私立校による高額な給与で教員人材を採用しようとする宣伝効果が師範系大学生の意識に浸透していることが考えられる。しかし、このような有力私立校は実際にはわずかである。最後に、個人レベルでは、先述した教職志望のないGさんと比べ、教職志望であり、さらに私立学校への就職を望んでいたLさんが積極的に教職に関

する情報を収集し、「教職」の現状をより客観的に把握したと考えられる。

② 勤務環境

師範系大学生が中国の私立学校の教師の全般的な勤務状態をどのように認識しているのか、どのくらいの理解を持っているのかについて、彼らの考えを把握するため、筆者は具体的な項目を提示せずに「給料の要素を除いて、私立学校の教師という仕事に対してあなたはどのように思いますか」と質問した。師範系大学生の3人は以下のように語った。

「私立学校は比較的公平です。公立学校では、教師は仕事を怠けて業績が上げられなくても、後ろ盾さえあれば誤魔化すことができますが、私立学校ではすぐ解任されることになるでしょう。この2種類の学校の間には、福利などの待遇上の差がある以外にやはりこの公平の問題です。」

(Lさん)

「私立学校での仕事はもっと大変ですね、プレッシャーがかかります。教師間の競争が厳しいです。しかし、このような高圧な環境は、自分の成長に有益だと思います。私立学校では教師と契約を結び、招聘制が採用されていますので、キャリアアップの環境はより公平であると思います。」

(Tさん)

「私立学校は授業の量が多いですから、教師自身にとって、経験の蓄積と能力の向上により有利です。また、職場での人間関係は公立学校ほど複雑ではありません。」(Gさん)

師範系大学生の3人は学校での勤務環境を主に「労働量」「人間関係」「公平性」などの観点から考えている。以上の3人の語りに基づいて次のようにまとめることができる。すなわち、公立学校と比べ、私立学校では教師の仕事量が多く、プレッシャーがかかり、教師間の競争が厳しいと考える一方、招聘制によって教師が解任される可能性がより高いため、教師自身にとって、経験の蓄積と能力の向上に有利であり、より公平な勤務環境があるという認識があ

る。一方、私立学校の現職の教師は学校に解任される可能性が高いとの認識の影響で、私立学校に対する帰属感が稀少であるという問題を抱えている。しかし、私立学校での解任のリスクに対して、師範系大学生はそれを教師自身の能力向上及び公平な勤務環境の保障として考えている。また、就職の主体としての師範系大学生は私立学校教師の勤務中に発生しうる感受といった感情的な要素を重視する傾向があると見られる。

また、Lさんは「公立学校では官本位という問題があるため、教師たちの仕事に対する能動性やモチベーションに悪影響を与えています。」と批判した。

「官本位」の概念は20世紀の1980年代に表れ、経済学に言う「金本位」に相對する概念である。「官本位」の価値観は、権力がすべての基準であり、権力さえあれば何でもできるという「権力中心社会」の特質を表している。中国では、計画経済時代に由来し現在も続く垂直的任命制が「官本位」の繁殖する体制の土壌となっている。教員採用・昇格・異動などをめぐって賄賂事件が頻出し、「官本位」思想が公立学校に氾濫していると言っても過言ではない。「官本位」問題の解決策について、Lさんは「教員枠制度を取り消してほしい」との見解を示した。しかし、教員枠制度は政府が公立学校教師の人事及び給料を管理する上で欠かせない制度であるため、簡単に撤廃できるものではない。近年、中国の公立学校ではPRP 給与制度⁽²⁾という業績主義型給与制度が導入され、教師のモチベーションを高め、平等なキャリアアップ環境作りを図っているため、公平性における公立学校と私立学校との差が縮小していくことが期待される。

師範系大学生は私立学校には契約の形式で教師と学校の両者の権利と義務が明確に定められ、優勝劣敗の勤務環境があるという認識がある。逆に言えば、このような意識は師範系大学生が私立学校に就職しようとする一因となるかもしれない。私立学校が教職志望者を引き付けるために、公平・平等な環境作りを強化することが必要である。

③私立学校が教員を引き付けるために改善すべきと思われる要素

調査対象者の師範系大学生3人は、公立

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

学校か私立学校かによって教師の待遇に差が付くことは不合理であるとの見方を示したが、実際の就職に当たっては、3人とも公立学校に傾く就職志向があることが分かった。私立学校での就職を回避する要因あるいは私立学校が教員を引き付けるために改善すべきと思われる要素は、「福利厚生と給料」(Tさん)、「福利厚生」(Gさん)、「教員研修」(Lさん)である。中国の公立学校では公的教員枠制度によって、給料・福利厚生・教員研修など教師自身にかかわる待遇が決められ、学校間の格差がほぼなく、教員が学校間を異動することが制度的に保障される。一方、私立学校には公的教員枠がないため、学校独自で教員に給料や福利厚生を提供するため、学校間にばらつきがある。また、教員採用・身分保障における公立学校と私立学校との根本的な制度上の違いについて、TさんとLさんは「編制(教員枠)」にあるとの見方を示した。

「教職員の福利厚生を具体的にどのように捉えていますか。」という質問に対して、Tさんは明確に回答しなかったが、「福利厚生によって生活の保障に心配がありません。」という回答からは、公立学校教員が加入可能な各種保険、いわゆる「五险一金」⁽³⁾を意味することが考えられる。Gさんは「保険、つまり五险一金のことです。そのほか、住宅と通勤の問題ですね。現在、不動産の値段がすごく高騰しているでしょう。」と答えた。また、福利厚生の面で大きな差がなければ、公・私という学校の属性上の差異を軽く見るはずだと述べた。Lさんは「五险一金以外に、休日と休暇に慰問品が配られることです」と答えた。つまり、調査対象者の3人の師範系大学生は中国の学校セクターにおける福利厚生を共通に「五险一金」のこととして認識し、重視している。中国の学校セクターでは、「五险一金」は公的教員枠制度に伴う福利厚生であるため、公立学校の教師しか適用されない。

「編制(公的教員枠)というものについて、あなたはどのように捉えていますか。具体的にどのようなものを指していますか。」という筆者の質問に対して、Tさんは「私は編制をととても重く見えていますね。ただ、この編制が一体なぜそんなに重要なのか、何なのかについて、正直に言うと深く考えたことがあります

ませんでした。編制があれば、生活の保障に心配がありません。」と答えた。「編制を重視する理由として他人、あるいは世論による部分がありますか。」という質問に対して、Tさんは「はい、そうです。社会的世論に影響されていますね。現在、就活生の話題は、まず、編制があるかどうかです。次に、給料はいくらあるかを聞くことですね。」と答えた。

「編制の有無は身分の相違をもたらしていますね。今の大学生のなかで、就職に際して、こういう身分上の比較という心理がありますか。」という質問に対して、「はい、ありますよ。編制がなければ、あるいはこれからも編制に入る見通しさえなければ、恥ずかしいことですよ。」と答えた。現在の中国の師範大学大学生は就職するに際して、教員枠の有無を重要な基準として見ることもある。つまり、師範系大学生は「編制」を正式な教員身分を保障するものとして認識している。また、「編制」があれば、安定して働き続けられるだけでなく、「五险一金」といった福利厚生も享受できるようになる。

「教師の給与・福利厚生などにおいて、私立学校でも公立学校と同じような環境が整備できれば、あなたはどの教師になりたいですか。」という質問に対して、師範系大学生は以下のように答えた。

「多くの人はやはり相変わらず公立学校を選ぶと思います。個人的には、短期的には私立学校に勤務するかもしれませんが、長期的にはやはり公立学校のほうがいいです。」(Tさん)

「これは矛盾する問題です。明確な改善策はないと思います。たとえ福利厚生の面で公立学校と同じ水準を維持できても、私立学校では解任の危険性が常にあります。公立学校はそうではないです。」(Lさん)

つまり、私立学校では公的教員枠制度が存在しないため、たとえ公立学校と同じような勤務環境が整備されたとしても、解任の可能性が公立学校より大きく、教職志望者は公立学校に就職することになるとの考えである。

Gさんは「福利厚生の面で大きな差がなければ、

公・私という学校の属性上の差異を軽く見るはずだ。私立学校を選択肢の一つとして考えてみる。」と述べた。仕事の安定性を重視するTさんとLさんとは異なる見方を持つ理由は、男性のGさんが女性のLさん・Tさんと違って、仕事の安定性をそれほど重視しないという性差にあると考えられる。この点は、一般大学の大学生の就職意識に見られた安定性における性差という結果と一致する(李2011)。

また、Lさんは「私立学校では教師の仕事の量がとても多いから、公立学校より給料を多く提供することは当たり前です。また、私立学校は公立学校の高齢の教師や退職した教師を多めに雇うべきであると思います。」と述べた。しかし、先述したように、私立学校が公立学校からの高齢の教師や退職した教師を中心に雇用することが私立学校の長期的な発展に弊害をもたらしているという問題がすでに多くの研究において指摘されている。Lさんのこのような見解は私立学校の改革への熱意を表すものだが、私立学校における教職年齢構成の問題を解決するには決して妥当な解決策とはいえない。Tさんは「私が私立学校に就職することについて、親は反対しています。編制がないため、仕事が安定していないから。」と述べた。

以上の分析から、師範系大学生は中国の公立学校にある公的教員枠制度に対して、「公立学校での官本位問題をもたらす」反面、「安定的に長く働き続けられる」「福利厚生が保障される」といった一長一短の見方があることが分かった。一方、公的教員枠制度が適用されていない私立学校は、教師に公平な勤務環境を提供することによって、自身の魅力を高めることが求められる。

④公立学校に就職することによる戸籍転換の意識

今回のインタビュー調査の対象者である師範大学師範系大学生の3人は就職による戸籍の転換を図る意識がそれほど強くなかった。ここから、戸籍の転換という目的がある師範系大学生は私立学校に就職する可能性が極めて低いことが予想される。この問題も私立学校自身では乗り越えられない制度的障害である。また、先述したように、今回の調査対象地は中国の地方都市であり、急速な都市化が都市周辺に住む非農業人口に住宅の利益をもたらしているこ

とで大学生の戸籍転換の意欲がそれほど強くはないものと解釈できる。一方、北京や上海など大都市では戸籍への規制は相変わらず強く、このような地域の大学生は地元の企業あるいは公立学校に就職し、大都市の非農業戸籍から転換しようとする意識があるかもしれない。この点について、中国の大都市部にある大学生を対象にする職業観の研究が必要である。

⑤教職及び私立学校への就職に向けた就職指導

師範大学における師範系大学生を対象とする教職または私立学校への就職に向けた就職指導の実態について、師範系大学生の3人と同大学の教員1人に確認した。河北師範大学では大学4年次に「大学生就職及び就職指導」というカリキュラムがあることが分かった。しかし、調査対象者の大学生3人は「大学4年次に開設するのはあまりにも遅すぎます。大学4年は皆が就職に忙しいから、授業に参加することが少ない」(Lさん)、「大学4年次に開設されているため、授業をサボる大学生がとても多く、あまり効果がない」(Gさん)、「就職指導の授業があります。ただ大学4年からですので、遅いと思います。また、皆が実際に就活した経験がないため、直接に就活法などを教えても効果が低い」(Tさん)と述べており、現行の就職指導に対する満足度は低いと言える。この結果は、先行研究(孟2007)の結果と一致する。

現在の就職指導の教育内容は、「履歴書の作成法や面接に関わる注意事項」(Lさん)、「履歴書の作成法や面接の要領」(Gさん)、「就活法」(Tさん)である。私立学校の教員になるための教育内容は就職指導の授業には全くないことが師範系大学生3人への聴き取りからわかった。「普段の授業では、このような内容はほとんど含まれていませんでした。特に、私立学校についての正確な認識を樹立させるための内容はありません」(Lさん)、「ほかの授業でも、私立学校の現状などの内容はほとんどありません」(Gさん)ということから、普段の授業にも私立学校の教職に就くための内容はほとんどない現状がわかる。また、「公立学校と私立学校を区別して教職に就くための内容はありません。私立学校に関する内容はほかの授業の中には少しありますが、とても少ないです」(Tさん)というように、師範大学のカリキュラムで

は、教職に関する教育内容が公立学校と私立学校を区別せず一括して実施されている。

私立学校における教職の理解に関する教育内容の欠乏による弊害について、「皆(大学生)は教師になっても、おそらく公立学校の教師になろうと思っているのではないか。現在の大学生は私立学校に対して一定の理解・認識を持っているにもかかわらず、その理解・認識は他人や世論による部分が多く、公立学校ほどリアルに捉えているわけではない」(Gさん)、「皆の私立学校に対する認識は全部他人から聞いたものです」(Tさん)と述べている。また、師範大学のカリキュラムに私立教育に関する教育内容を増設する必要性については3人の大学生から支持を得た。

調査対象者の大学生3人が師範大学の就職指導に対して有する満足度は低いこと、師範大学の就職指導と通常のカリキュラムに私立学校または私立学校の教職に関する教育内容が欠けており、さらにこの部分の教育内容の増設を期待する意識があることが明らかになった。また、本章の冒頭で指摘したように、調査対象者の大学生は3人とも私立学校に就学した経験や見学した経験が全くない。さらに、先述した公立学校の教職に就く予定のLさんとTさんは、学校生活における教師との共有経験から教職志望が生まれていた。つまり、私立学校に就学する経験を持たないため、私立学校及び私立学校における教職というものが公立学校に即した形で理解され、歪んだ認識が生じかねない。さらに、私立学校教員との切実な「感動」を持たないため、私立学校の教師になろうとする原動力も生まれない。もちろん、中国の私立学校は公立学校と比べて、その独特な歴史的原因によって量的、質的な劣位性を抱えているが、目下、私立学校に向けての教員養成を成立させるためには、大学、特に師範大学の役割が欠かせない。また、長期的には、私立学校の発展とともに、中国人の中に私立学校の卒業生の割合が増加することで、公・私平等な学校理解及び教職理解を醸成する社会土壌を築くことが根本的な解決策として期待できるだろう。

Ⅲ 結論

師範系大学生の教職志望が、現実の学校に影響されるだけではなく、教師との接触といった過去の学校生活の経験から次第に形成されることが見出された。また、このような大学進学前に形成された教職志望は師範大学への進学、さらには卒業時における教職への就職にプラスの影響を与えている。私立学校に就学する経験を持たないため、私立学校及び私立学校における教職というものが公立学校に即した形で理解され、歪んだ認識が生じかねない。さらに、私立学校教員との切実な「感動」を持たないため、私立学校の教師になろうとする原動力の欠如という要因により私立学校での就職を忌避することがある。

師範系大学生は現実社会に対して比較的鈍感であり、私立学校の給与水準に対して、公立学校より給料が高いという過去の状況認識に留まる傾向がある。これは、中国都市部にある一部の有力私立校による高額な給料で教員人材を採用しようとする宣伝効果が師範系大学生の意識に浸透していると考えられる。

師範系大学生は中国の私立学校または私立学校教職に対する理解が乏しい。この原因は、①現在の師範大学卒者が私立学校に無関心であること、②労働市場における不完全な情報、③私立学校の不十分な学校宣伝という3つに帰せられる。しかし、私立学校に就職志望のある師範系大学生は私立学校の実態をよりリアルに捉えている。

教員の「福利厚生」は師範系大学生が私立学校への就職を忌避する規定要因である。「福利厚生」上の差をもたらすものとして、師範系大学生は公的教員枠制度を考えている。

師範系大学生は中国の公立学校にある公的教員枠制度に対して、「公立学校での官本位問題をもたらす」反面、「安定的に長く働き続けられる」、「福利厚生が保障される」といった一長一短の見方があることが分かった。一方、中国の私立学校の教員契約制度に対して、「教師自身の能力向上及び公平な勤務環境の保障である」との考えがある反面、「解任のリスクがあるため、不安定である」という矛盾した意識もある。しかし、実際の就職志望は、公立学校に傾いている。

私立学校は人材採用に当たって、信用性を高めるべきである。また、私立学校は人材招聘会など公式な人材採用ルートだけに拘るのではなく、私立学校への教職志望者を積極的に歓迎する姿勢を取り、個別採用など柔軟な人材採用の仕組みを構築することが必要である。また、公的教員俸制度が適用されていない私立学校は、教師に公平な勤務環境を提供することによって、自身の魅力を高めることが求められる。

中国の私立学校は公立学校と比べて、その独特な歴史的原因によって量的、質的劣位性を抱えているが、目下、私立学校に向けての教員養成を成立させるためには、大学、特に師範大学の役割が欠かせない。また長期的には、私立学校的发展とともに、中国人の中に私立学校の卒業生の割合が増加することで、公・私平等な学校理解及び教職理解を醸成する社会土壌を築くことが根本的な解決策として期待できるであろう。

師範大学師範系大学生の私立学校への就職を促すために、師範大学では私立学校及び私立学校における教職に関する教育内容の増設及び就職活動の早期化が促進されるべきである。また、従来のような集団的就職指導から、個別指導プログラムを含む大学生のニーズに応えられる多様な就職支援が求められる。これらの就職指導によって、就職難により大学生が持つストレスを解消し、大学生のメンタルヘル스에配慮することが求められる。また、大学は労働市場の脈動を掌握し、社会需要や企業の採用動向などを大学生に正しく意識してもらい、就職を促進するための仲介機構へと転換することが期待される。

註

① 同じ回答を得た研究は、葉(2000)、曹・李・劉(2005)、姚・束・王(2001)などがある。

② Performance related pay。中国語は「績效工資」である。

③ 「五險一金」とは養老保険、医療保険、失業保険、公傷保障及び生育保険、住宅公共積立金である。「五險一金」制度は中国の国有機関、公務員または学校、病院など、政府が出資する社会公益を目的とする機

関(いわゆる「事業単位」)に適用されている。

引用文献

- 陶西平・王佐書『中国民办教育』科学教育出版社、2010年、p. 36
- 宋光輝『中国民办教育供給与需求的経済学分析』西南財経大学出版社、2010年
- 孫霄兵『中国民办教育組織与制度研究』中国青年出版社、2003年、pp. 153-155、159
- 李敏『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題—背景の社会学的検討』広島大学出版社、2011年 pp. 62 - 71、81、209、210
- 楊寧坤「転型期高師卒業生流向探析-对広西師大卒業生就職後流向的調査分析」『中国大学生就業』2006年14期 p. 96
- 曹瑞・李輝・劉永恒「高師大学生職業価値観的比較研究」『教書育人』2005/1-2 pp. 30-31
- 葉松慶「当代師範大学生的就業観透視」『青年探索』2000年第2期 pp. 26-28
- 趙剛・張奇「師範大学卒業生職業価値観的調査研究」『遼寧師範大学学报(自然科学版)』第28巻第4期 2005年12月 pp. 511-512
- 張玉柱「高師学生職業価値観特点及影響因素分析」『内モンゴル師範大学学报(教育科学版)』2005年1月 第18巻 第1期 pp. 57-60
- 姚国榮・束从敏・王旭東「高師院校卒業生就業現状調査研究」『安徽師範大学学报(人文社会科学版)』第29巻第1期、2001年2月 p. 146
- 楊寧坤「転型期高師卒業生流向探析-对広西師大卒業生就職後流向的調査分析」『中国大学生就業』2006年14期 p. 96
- 高潔・崔智濤「2001年華東師範大学卒業生就業状況的調査分析」『河南職業技術師範学院学报(職業教育版)』2002年 p. 66、68
- 李斌・王欣「2002年河北師範大学卒業生生涯规划的調査研究」『河北師範大学学报(教育科学版)』第6巻第2期、2004年3月
- 陳秀英・杜国莉「持不同職業態度的師範生職業価値観定量比較研究」『職業時空』2007年18期 p. 50
- 王俊剛・呂勇「高等師範院校卒業生職業価値観的研

中国の師範大学師範系学生の就職意識に関する研究

- 究』『山西教育』2007.10 p. 37
- 張如柏 「高師卒業生就業行為及其意向的調查研究」
『当代教育科学』2004年第17期 pp. 33-34
- 韓立娟・安静 「对高等師範院校卒業生就業意向的調查与分析」『職業時空』2007年 pp. 39-40
- 涂艷国・李偉 「師範卒業生就業情況調查報告」『教育与經濟』2005年第3期 pp. 5-6
- 朱生玉・周曉蕾 「我国大学生就業期望的調查与影響因素-基于中西部十省份的实证研究」『現代教育管理』2010年第11期、pp. 118-121
- 馮華 「五種因素影響了卒業生就業-北京師範大学 [大学生就業研究課題組] 調查」『中国大学生就業』2005年 pp. 34-42
- 仇立平・林少真 「1990年代以来上海大学生價值觀念和行為方式演變研究」『思想理論教育』上半月 綜合 p. 71
- 孟統鐸 「2006年北京地区大学应届卒業生職業價值觀調查研究」『人口与經濟』2007年第1期 pp. 42-47
- 樂儷雲 「现实与差距：和諧視野下的中国教師工資水準研究」『現代教育管理』2009年第1期 p. 92